

# 社会的差別概念に関する調査研究(3)

－黒人差別理解のための自然条件教示の効果－

研 攻 一 名誉教授

（2018年9月28日受理）

## 〔要約〕

社会的差別の一つである黒人差別を理解させるための自然条件教示の違いの効果を検討した。共通の教示内容の他に、自然条件としてA群では「サトウキビの工程」だけが、B群では「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量」の教示内容となっている。また日本人の差別感が減少するかについても検討した。次のような結果が得られた。

- (1) B群はA群に較べて、総得点と歴史課題分野で効果があった。
- (2) 事後の「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量」得点を上中下に分けた時、A群では中位群が、B群では上位群が歴史課題分野で効果があった。
- (3) 「サトウキビの工程」の事前の「正」「誤」別の「綿花の工程と適正気温と降水量課題」への転移では、A群の「正」が「誤」に較べてやや効果があった。
- (4) 日本人の差別感で「黒人差別は10年以内になくなるか」課題ではA群が効果があり、「そう考える理由」と転移課題ではB群でやや効果があった。

## I. 問題

社会的差別の問題は、主に差別する側が無意識に差別しながら、それを当然と考える判断によってなされていく。その際の判断の根拠の多くは、差別する側によっても明らかでなく、その時点でただ感覚的、情緒的な嫌悪感が沸き上がってくるものが大半ではなかろうか。こうした情操の背景にまつわる問題は、本来中性的な刺激に評価を加え、優劣があると感じさせる歴史的な背景に由来するものが多いのではないか。

日本でも穢多・非人（部落）や戸籍を持たなかった漂流民は<sup>1)</sup>、顔かたちは普通の日本人と同じにも関わらず、社会的な差別の対象にされてきた。広辞苑<sup>2)</sup>の「穢多（えた）」の項目を見ると「中世・近世の賤民身分の一。牛馬の死体処理などに従事し、罪人の逮捕・処刑にも使役された。江戸幕藩体制下では、非人と共に士農工商より下位の身分に固定、一般に居住地や職業を制限され、皮革業に関与するものが多かった。一八七一年（明治四）太政官布告により平民の籍に編入された後も社会的差別が存続し、現在なお根絶されていない。」と記されている。社会機能が円滑に維持存続するための構成員の仕事や役割には良し悪しはない筈である。それなのに多くの構成員がしたくない仕事や役割を果たしてくれている人間に対して、差別する傾向が見られる。個人的な感想であるが、ゴミ収集

やし尿処理業者に対して、自分たちが排出したものの処理をお願いしているにも関わらず、そうした上から下を見るような情緒的な振る舞いや心理作用を感じることがある。

こうした心理作用には二つのことが考えられる。一つは我々の中に、他人との間に差別化したい欲求があるのではないかとことがある。それによって理屈では理不尽だと分かっている、感覚的・情緒的に差別をしてしまうのではないかと。二つ目は、ほとんどの社会的差別には、歴史的な経過があり、社会の中でその経過を経ることによって、ある違いが暗黙の了解を得て、公然と社会的差別に仕立てられていくのではないかとということである。

アメリカの黒人差別の問題の根源は、藤川の言う「白人性」<sup>3)</sup>による白人の人種差別の歴史<sup>4), 5)</sup>に加えて、アフリカから連れてこられた黒人奴隷の問題と深く関わっている。白人が黒人差別をするようになった経過は歴史の中で理解することができるものの、大きな人種差別の一部に含まれている。その人の能力や性格などとは無関係に、肌の色の違いによって人種差別するという単純で短絡的な行動が見られる。しかも黒人かどうかの判断についても次のような問題さえ生じてくる。白人と黒人との間の子孫が肌の色が黒いなら区別できるが、その後何代にも亘って白人との混血

が続いた結果、見た目には黒人とは分からないような場合でも、例えば曾祖父母や祖父母の一人が黒人で、八分の一、四分の一が黒人の血が入っていれば黒人の烙印を押されてしまう。これを「ワン・ドロップ・ルール」<sup>6)</sup>と呼んでいる。オバマ大統領は奴隷由来の黒人の子孫ではなかったから、黒人差別の対象にならなかったのだろうか。それとも多少なりとも社会的差別を経験したのだろうか。このように人種の違いによる肌の色という単純な問題を越えた延長線上に、歴史的に醸成された複雑な観念的な差別が生み出されている。黒人差別の問題は人種差別と複雑に関連しながら、単なる肌の色の違いによる差別から、観念的な差別へと繋がっている歴史的な原因がある。このように黒人差別の問題は、見た目の違いを超えた観念的な日本の穢多・非人の差別の問題と似たような状況とも言える。

前研究<sup>7)</sup>では黒人の社会的差別の問題に関して2つの問題を検討した。一つ目は黒人差別が生じて来た歴史的問題を、学生たちにどのように教示すれば理解させることができるかの問題である。もう一つは日本人にある社会的差別に関する差別感の問題である。

一つ目の問題では、社会的な黒人差別に繋がる黒人奴隷の歴史的背景を理解させるために、次のような実験を行った。教示文の中で、共通部分の他に、黒人差別の社会的歴史（「黒人の生け捕り」「黒人の人権運動」）に重点に置いた教示文を示した（前A）群と、サトウキビや綿花の生産労働（「砂糖の歴史」「砂糖を採り出す技術」「サトウキビの栽培条件」<sup>8)</sup>）に絡んだ自然科学分野に関する教示文を示した（前B）群の2群に分けて、その学習及び転移効果の比較を行った。その結果、社会的歴史に重点を置いた教示（前A）群が、サトウキビや綿花の生産労働に絡んだ自然分野に関する教示（前B）群よりは、社会的歴史分野で優勢であると共に、自然科学分野でも差がない効果を示した。

黒人差別の問題はアメリカの教科書では、性差別やマイノリティ差別と同様の社会問題の一つとして考えさせるようになっている<sup>9)</sup>。日本でもこれは同様である。また世界史に関わる書籍<sup>10), 11)</sup>では、黒人奴隷の経緯を世界史の流れの中で示していて、殆どのものは社会的歴史に重点を置いた社会認識の理解を優先にしている。

黒人の祖先の多くがアフリカから奴隷として西インド諸島のサトウキビ生産やアメリカの綿花栽培のために連れて来られた場所は、栽培に見合った自然条件を満たしている地域である。それを考慮せずに、単に黒人がこれらの地に連れてこられ、奴隷として人道的な扱いをされなかったことだけを強調することは、黒人

に対する社会的差別を理解するには片手落ちではないかと思えてならない。

人種差別の中の奴隷に関する黒人差別に対する認識を学生に持たせるには、前研究で行った社会的歴史経過ばかりでなく、自然条件についての理解を前研究以上に重点的に行わせてみる必要があるのではないか。日本の学校教育の中では、大学受験に関して文科系と理科系を分けることが行われおり、学習者の認識にも、社会科学分野と自然科学分野に分けて思考する傾向さえ垣間見ることができる。しかし社会認識と自然認識を分けて考えること自体が、持つべき認識の在り方として片手落ちであり無意味なことではあるまいか。今回の社会的黒人差別の理解でも、こうした日本の社会に蔓延している文科系と理科系及びその認識の在り方の境界を越えて、学習者が幅広い自然認識と社会認識を一体化させた認識を持たせる試みを行うことが必要ではないかと考えている。

そこで本研究では、以下の教示文の効果を検討する。黒人の社会的差別が生まれる社会的歴史に関わる共通部分の他に、自然条件としてA群では「サトウキビ栽培の工程」のみを教示し、B群では「サトウキビと綿花の工程と適正気温や降水量」を教示して、その効果の違いを検討する。B群では、「サトウキビと綿花栽培のための適正気温と降水量」を教示することで、その栽培地でなければならない必然性を理解させ、その結果西インド諸島やアメリカ南部が対象地となること、そのことから黒人が奴隷としてこうした地域に連れて来られたことを理解させることを目指している。

そこでB群の「適正気温や降水量」の自然認識に関する教示文が、社会認識である歴史的な課題部分（「三角貿易までの歴史課題」「アメリカ現代史課題」）の理解を促進させる可能性があることから、2課題への転移をA群との比較によって検討する。また「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量課題」では、教示内容が含まれるB群と含まれないA群では、B群がA群を凌駕することが予想される。

また「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量課題」の事後調査の結果を上中下群に分けて、歴史的な課題部分との関連及びA群の「サトウキビの工程」の事前の理解の程度と「正」「誤」の違いが「綿花の工程と適正気温と降水量課題」つまり同一分野内への転移の違いを引き起こすかについても、B群との比較で検討する。

二つ目の問題は日本人の差別感に関する問題である。日本人の心理にも東南アジアや中東の人々に対しての暗黙の差別や、白人に対する劣等感とも言える心理的機制があるにも拘らず<sup>12)</sup>、日本人の多くは自分たちは

人種的差別感など持ち合わせていないと主張する。黒人への差別感を失くすには、人種的に平等であることを地道に粘り強く話し合ったり相互訪問などを通して、解消できると考えているようである。こうした考え方は、例えばイスラエルとパレスチナの領土問題でも同じような反応をすることが予想される。ユダヤ人が2000年前に故郷を追われ、世界各地を流浪しながら、第二次世界大戦後に建国したイスラエル、それまでその地に2000年間住み続けていたパレスチナ人、その地はそれぞれの民族にとって共に故郷そのものなのである。この歴史の長さに伴うその地に対する思いを話し合いによって解決することは、そう簡単なことではないのではないか。そう考えると血を血で洗う争いになることも予想できない訳ではなかろう。こうした歴史認識を持つようになれば、話し合えば分かり合えるという日本人のプリミティブで楽観的な差別感の在り方は、稚拙なものとしか言えないのではないか。今も厳然と存在する部落の問題の深刻さに対する無関心さも、こうしたプリミティブな認識の在り方ゆえにあるのかも知れない。そこでこの日本人の差別感を、今回の教示文で変更できるかを検討する。

本研究では、教示内容と直接関わる「白人による黒人差別は10年以内になくなるか」と「そう考える理由」を選択させる。「話し合えば分かり合えるはずだ」と考えている日本人の素朴な差別感を、A群とB群の教示内容が減少させるのに違いがあるかどうか、また差別に関する他の3課題に対して転移するかどうかにについても検討する。

## II. 方法

1. 対象者 U短期大学1年生 86名

2. 調査期日 平成30年1月19日

3. 調査手続き

(1) 調査「アメリカで黒人が差別されるようになった歴史的原因」について、事前調査－教示文－事後調査からなる冊子を配布して、被験者のペースで読み回答させる。

(2) 2群（A群、B群）を構成し、各群43名をランダムに配置し、一斉に実施する。（所要時間は40分程度であった）

(3) 教示文の構成（教示文は引用文献<sup>8), 10), 11)</sup>を参考にして作成した）

教示文の構成は、両群共通部分と各群だけの部分がある。共通部分以外では、

- ・ A群では、「アフリカ黒人がなぜ奴隷として連れてこられるようになったか」と「黒人奴隷に目をつけるようになった理由」の間に、「砂糖

の採り出し方の工程」（四角で囲った部分）の自然条件が入っている。

- ・ B群では、「三角貿易という言葉を知っているか」と「南北戦争の結果」の間に、「サトウキビと綿花の栽培と黒人奴隷」の項目で、「サトウキビと綿花の工程と適正気温や降水量」（四角で囲った部分）の自然条件が入っている。

(4) 調査内容

事前と事後の調査内容は同一である。

(7) 事前調査

「これらの問題は選択肢になっています。各問で1つだけ選んでください。」と指示をした上で以下の調査を行う。

1. 分野（内容について）

① スペインとポルトガルは、1493年に大西洋の教皇分界線で世界の支配地を分けました。どう分けたと思いますか。（教皇分界線）

- ・ 西側の南北アメリカはポルトガル、東側のアフリカ、インド地域はスペインに分けた
- ・ 北の北アメリカはスペイン、南の南アメリカはポルトガルに分けた
- ・ 西側の南北アメリカはスペイン、東側のアフリカ、インド地域はポルトガルに分けた
- ・ アフリカはスペイン、インドはポルトガルに分けた

② メキシコのアズティカ帝国、南アメリカのインカ帝国が減じた原因はどんなことだと思いますか。（インカが減じた原因）

- ・ 奴隷として働かせたことから減じた
- ・ 奴隷として働かせた上に、天然痘などの病気によって減じた
- ・ 天然痘などの病気になって減じた

③ その減った割合は、元の人口に比べてどの位だと思いますか。（人口減った割合）

- ・ 1/5位に減った ・ 1/20位に減った
- ・ 1/50位に減った ・ 1/100位に減った

④ スペインが先住民たちを奴隷にした理由は、どんなものだと思いますか。（スペインが奴隷にした理由）

- ・ スペインの威力を示し、スペイン人に従うようにさせるため
- ・ キリスト教に改宗させる見返りに、国が先住民を奴隷にする権利を与えた
- ・ 戦争に勝ったものは、負けたものを奴隷にする習慣が歴史的にあったから

⑤ イギリスが黒人を奴隷にした理由とは何ですか。（イギリスが奴隷にした理由）



- ・先住民は人間でないと考えていたので、家畜のように使うのが当然だと考えていた
- ・キリスト教を信じていない人たちは、家畜と同じだという思想があったから
- ・スペインが南アメリカで行った奴隷政策を、ヨーロッパの国々が真似したから
- ⑥ イギリスが黒人狩りをした方法とはどんなものでしたか。(イギリスが黒人狩りした方法)
- ・イギリス人が現地に行って、黒人狩りをして集めた
- ・アフリカの王に織物や鉄砲を贈り、見返りとして黒人狩りをさせて集めた
- ・職を求めている黒人たちをうまくだまして、奴隷船に連れ込んだ
- ⑦ 奴隷船の環境はどうだったと思いますか。(奴隷船の環境)
- ・船の旅が快適に過ごせるように、配慮されていた
- ・詰め込めるだけ詰め込み、水や食料も十分与えられなかった
- ・死なない程度に、空間と食料が準備されていた
- ⑧ 三角貿易とはどんな貿易だと思いますか。(三角貿易)
- ・3つの国同士で貿易しあうこと
- ・自国の産物がある国に売って、その国にある原料や物を買って、それを別の国に売って自国に必要なものを買って、儲ける貿易のこと
- ・アメリカ、ヨーロッパ、アジア間の貿易のこと
- ⑨ 現在のアメリカ合衆国の綿花(わた)栽培は、どの地域で行われていると思いますか。(アメリカの綿花栽培地域)
- ・アメリカ全土で ・南部で ・北部で
- ⑩ アメリカの南北戦争では、北部と南部が戦いました。その結果はどうだったと思いますか。(南北戦争の結果)
- ・南部が勝ち奴隷制はなくならなかったが、黒人への差別感もなくならなかった
- ・北部が勝ち奴隷制はなくなり、黒人への差別感もなくなった
- ・南部が勝ち奴隷制はなくならなかったが、黒人への差別感はなくなくなった
- ・北部が勝ち奴隷制はなくなったが、黒人への差別感はなくなくなった
- ⑪ 今でもアメリカの黒人差別事件は、主にどの地域で起こっていると思いますか。(現代の差別事件の地域)
- ・北部 ・南部 ・アメリカ全土
- ⑫ 1960年代に黒人と白人のバス、トイレ、学校などの使用施設はどのようなものだと思いますか。(60年代のバスやトイレの使用)
- ・白人も黒人も同じ施設やバスを使っていた
- ・白人と黒人は、それぞれ違う施設やバスを使うようになっていた
- ・その時の都合で、施設やバスは共同だったり違ったりしていた
- ⑬ アメリカの綿花栽培地では、黒人たちはどんな扱いを受けていたと思いますか。(綿花栽培地域での黒人の取り扱い)
- ・白人と対等な人間として扱われていた
- ・道具や家畜と同様に、白人と同じ人間とは見られなかった
- ・黒人の一人一人で、奴隷であつたり人間であつたりと扱いに違いがあつた
- ⑭ サトウキビを砂糖にするとき、どの工程の仕事が大変だと思いますか。(サトウキビの工程の難しい部分)
- ・植え付け ・刈り入れ ・ジュースを作る
- ・煮詰める ・蒸留し結晶させる
- ・船積みする
- ⑮ サトウキビに適した栽培条件は、どんなものだと思いますか。
- 気温は(サトウキビの適正気温)
- ・20～25度 ・25～28度位 ・30～35度位
- 降水量は(サトウキビの適正降水量)
- ・1000ミリくらいまで ・1000～1200ミリ
- ・1300～1500ミリ ・1500～2000ミリ
- ・2000～2300ミリ
- ⑯ サトウキビから砂糖を取り出す作業で、黒人たちの扱いはどうだったと思いますか。(サトウキビ作業の黒人の取り扱い)
- ・労働する時間や労働量が決められて、健康な状態で毎日仕事できるように配慮されていた
- ・重労働の仕事に従事させ、使い捨て思想で死んでも構わないと考えられていた
- ・重労働の仕事が終わると休息などの時間をあて、長く労働させられるようにした
- ⑰ 綿花栽培で、大変な作業で労働力を必要とするところは、どんなところだと思いますか。(綿花栽培の工程の難しい部分)
- ・種の植え付け ・畑の管理 ・綿摘み
- ・綿と種の分離 ・綿の洗浄
- ⑱ 綿花の栽培に適した条件は、どんなものだと思いますか。
- 気温は(綿花栽培の適正気温は)

- ・ 15～20度      ・ 22～27度      ・ 27～30度
- ・ 30～34度

●降水量は（綿花栽培の適正降水量は）

- ・ 600ミリくらいまで      ・ 600～1300ミリ
- ・ 1300～2000ミリ      ・ 2000～2500ミリ
- ・ 2500～3200ミリ

⑭ アメリカ南部の綿花（わた）栽培での黒人奴隷の扱いはどうだったと思いますか。（綿花作業の黒人の取り扱い）

- ・ 労働する時間や労働量が決められて、健康な状態で毎日仕事できるように配慮されていた
- ・ 重労働の仕事に従事させ、使い捨て思想で死んでも構わないと考えられていた
- ・ 重労働の仕事が終わると休息などの時間をあて、長く労働させられるようにした

2. 分野（差別感について）

① アメリカの白人による黒人差別は、10年以内になくなると思いますか。

- ・ なくなる      ・ なくなる

●その理由は？

- ・ 単なる人間同士の関係を超えた、悲惨な差別の歴史があるから
- ・ 白人も黒人も同じ人間なのだから、分かり合える日が必ず来るから
- ・ 心の中に育った歴史的な差別感は、そう簡単になくなるものでないから

② アメリカで最近起こっている白人警官による暴力や射殺事件などは、どうしたらなくすことができると思いますか。

- ・ じっくりと話し合いを続ける
- ・ 永遠になくならない
- ・ 政府が黒人差別をしない政策を進める
- ・ 時間が経てば、いつかなくなる

③ 私たち日本人が、黒人差別をなくすにはどうしたら良いと思いますか。

- ・ もともと差別感はない
- ・ 黒人差別の歴史を学ぶ
- ・ 黒人との国際交流をする
- ・ アメリカを訪問して、黒人差別の現状をみてる

④ 「黒人差別をしている白人」に対して、あなたならどうやって差別感をなくすような働きかけをしますか。

- ・ 同じ人間なのだから、差別すべきでないと話し続ける
- ・ 時間が経てば、差別感がなくなると思うので気

長に待つ

- ・ 黒人でも、白人と同じ能力を持つスポーツマンや俳優などの活躍を示して説得する
- ・ 黒人でも、白人と同じ能力を持つ医者、研究者、科学者を挙げて説得する
- ・ 差別感はなくならないと思うから、あきらめる

(イ) 事後調査

事前調査と同じものである。

(5) 教示文

表紙の「アメリカで黒人が差別されるようになった歴史的経緯」のタイトルの下に、①ページに従ってやってください。②一度質問に答えたら、前のページに戻って、書き直さないでください。③人と相談しないで、自分の考え方を記してください。④事前調査、読み物（お話し）、事後調査の構成になっています。調査は、事前と事後で同じですが、読んだお話をもとに、よく考え直して質問に回答してください。と記されている。

1. A群（お話は2度読んでくださいと指示）

「アメリカで黒人が差別されるようになった歴史的経緯」

アメリカでは、今でも白人による、黒人やアジア（黄色人種）系およびヒスパニック（スペイン）系の人たちに対する人種差別があるようです。アメリカは多民族国家で、1776年のアメリカの独立以降、色々な国からアメリカに移住として入ってきた人たちの子孫が、アメリカ人なのです。ロスアンゼルスなどのアメリカ西海岸には、アジア系の日本人や韓国人などが多数住み、「リトル東京」などの町があるほどです。そして二世や三世の人たちは、英語を話し、アメリカ国籍なのです。

白人のこの人たちに対する差別は現在でもあるのです。私の友人はアメリカ西海岸のサン・ディエゴの街を歩いていたときに、白人の男性からすれ違いざまに「ジャップ」（日本人に対する差別ことば）と言われたと話していました。こうした人種差別は黒人に対しては特に大きく激しいようです。私たちは、なぜ白人が黒人よりも優位なのか、理由が分かりませんが、歴史的な観点からは、いくつか原因が考えられます。

① 多くの黒人の先祖が、サトウキビの栽培や綿花の栽培のために、16世紀から18世紀にアフリカから奴隷として連れてこられ、その子孫であること

② 奴隷なので、道具や家畜と同様に扱われ、売買が行われてきたこと。生かすも殺すも、白人

である主人が思い通りにでき、人間としての扱いをすることはなかったことなどが考えられます。

(1) アフリカの黒人が、なぜ奴隷として、連れてこられるようになったのか。

- ① そのことを考える前に世界史を思い返してみましよう。

コロンブスのアメリカ大陸の発見（1492年）によって、南北アメリカにはスペイン人が入り込むようになりました。（その当時、世界の中心だったスペインとポルトガルは、勝手に世界を大西洋の真中で分けて、アメリカ側の西半分をスペインが、アフリカ、インドや日本などの東半分をポルトガルのものと1493年に「教皇分界線」を決めました。少し経って、ポルトガルから不公平だとの話（トルデシリャス条約）が出て、さらに西側に分界線を移動した結果、ブラジルはポルトガル領になりました。だから南アメリカではブラジルだけがポルトガル語で、他の国は全てスペイン語なのです。）

- ② メキシコのアズティカ帝国は、1519年にスペイン人のコルテスによって滅ぼされ、南アメリカにあったインカ帝国は、1533年にピサロによって滅ぼされてしまいました。これらの滅亡には、彼らが持ち込んだ天然痘も原因の一つだと言われています。

二つの文明を滅ぼしたスペインは、南アメリカに移住したスペイン人たちに、先住民（インディオ）たちをキリスト教に改宗させる代わりに、強制労働させる権利（奴隷にする）を認めたのです。先住民はスペイン人によって、このように奴隷にされ重労働を課された上に、ヨーロッパで流行していた天然痘や破傷風によって、人口が激減してしまいました。

16世紀にはマヤ、アズティカ、インカの人口は7000万～9000万人だったものが、百年後の17世紀には約350万人に減ってしまったと言われています。先進国であったスペインが、国として先住民（インディオ）を奴隷として扱うことを認めたのです。その結果、ヨーロッパの国々も先住民を奴隷とすることを悪いことではないという風潮が広がっていきました。

- ③ スペインからの移民の子孫によって、アルゼンチンやメキシコでは先住民（インディオ）の奴隷を使った大農場ができていきました。

そんな中で、アメリカのフロリダ半島の南にある、キューバやジャマイカ（ウサイン・ボルトの

故郷）などの西インド諸島を領有した国々（イギリス、スペイン、フランス、オランダなど）は、サトウキビを育て、砂糖を取り出すために大量の労働力が必要になりました。その当時のサトウキビから得られる砂糖は、最初は薬として重宝がられ、後には甘味料（かんみりょう）として使われるようになりました。

- ④ その砂糖の採り出し方には、次のような工程がありました。

- A) 大きなプランテーション（サトウキビだけを植えたぼうだいな広さの畑）でのサトウキビの植え付け
- B) サトウキビの刈り入れ
- C) サトウキビを砕いてジュースを絞る
- D) ジュースを煮詰める（につめる）
- E) 蒸留し、結晶させる
- F) 船積みする

これらの工程で、サトウキビを素早く処理しないと砂糖の収穫量が少なくなってしまいます。特にC)のサトウキビを砕いてジュースを絞る D)のジュースに煮詰めるが特に重要でした。

(2) 黒人奴隷に目をつけるようになった理由

- ① ヨーロッパの国々は、南北アメリカからの先住民の奴隷たちを使うことができないので、アフリカの黒人に目をつけました。イギリスなどはアフリカの王に鉄砲や綿織物などを贈り、代わりにその王はその国の黒人狩りを認めたのです。その時に黒人狩りを行った人たちに黒人もいました。黒人が黒人を狩（か）って奴隷にしたのです。その土地で生活していたのに、突然捕まえて、有無（うむ）を言わずに奴隷船に連れ込まれた訳です。

その狩った黒人たちを奴隷船に乗せて、奴隷商人たちが大西洋をこえて西インド諸島の島々に奴隷として売りました。この奴隷船には、ぎっしりと奴隷を積み込み、飲み水も十分でなく、脱水症状や伝染病にかかって亡くなる奴隷が後を絶たなかったと言われています。

16世紀（1500年代）から18世紀（1700年代）にかけて、3000万人から6000万人（驚くなかれ、日本の人口の半分）にも及ぶ黒人が、西インド諸島やアメリカ大陸に向けて積み出され、そのうち3分の2が航海の途中で命を落とし、海中に捨てられたと言われています。

(3) 三角貿易という言葉を知っていますか

- ① 17世紀から18世紀には、イギリスやオランダなどは、アフリカに綿織物、雑貨や鉄砲などを売って、そこで得たお金で黒人奴隷を買って、西インド諸島（キューバ、ジャマイカなど）に運び、そ



ここで黒人奴隷を売って、そこで得たお金で砂糖を買って、イギリス本国などのヨーロッパに運び砂糖を売ったのです。その貿易で得られた利益は30%ぐらいと言われています。その当時としては莫大な利益でした。このように、黒人奴隷は強制的にアフリカから連れていかれ、西インド諸島やアメリカで売るための商品だったのです。このような貿易を三角貿易といいます。

- ② その黒人奴隷の一部が、アメリカ南部の綿花（ワタ）生産の労働力として売られました。綿花を作る手順は、種まき⇒畑の管理⇒綿摘み⇒綿と種の分離⇒綿の洗浄⇒船積みする となっていました。

今では機械で種付け、収穫などは機械化されていますが、1860年の南北戦争当時までは、南部の州では黒人の奴隷が、綿花生産に従事させられていました。

#### (4) 南北戦争の結果

- ① 黒人奴隷は道具であり財産の一部で、人間ではなかったのです。1860年にアメリカ大統領に北部（工業が中心）出身のリンカーンがなると、南部の国は南部だけで国を作ろうとして反旗を翻（ひるがえ）しました。それを許さないリンカーンの北部との対立が南北戦争だったのです。しかし北部が勝って奴隷制はなくなった筈でしたが、その南部の白人たちの黒人差別はなかなか消えることはありませんでした。道具だと思っていた黒人を、対等な人間と考えることは難しく、昔の白人優位の社会が好ましいと感じている人たちが、たくさんいたのです。そこで南部の人々は地域内の法律を作って、黒人をこれまでの奴隷同様にしておくことを考えていました。

- ② 黒人の子孫たちは、第二次世界大戦後、人間的な暮らしができるという噂を聞きつけて、南部からニューヨークなどに移り住みましたが、そこでできたのがニューヨークのスラム街でした。スラム街の黒人の子孫たちは、そこでも職がない、非行に走るというような荒（すさ）んだ生活をしなければならなかった。結局ニューヨークでも白人たちと同じような人間らしい生活はできませんでした<sup>13)</sup>。

1960年代までは、学校、バス、トイレは白人と黒人は別々の施設を利用するのが当然だったのです。（最近公開されたアメリカ映画「ドリーム」は、1962年のアメリカの地球周回軌道飛行をしたジョン・グレンの功績の影に、白人の差別の中で有能な数学者を含む黒人女性たちが活躍したこと

を主題にした映画です。その場面でもトイレは、遠くの黒人専用の場所まで行く様子が見られます。視聴することをお勧めしたい映画です。）

#### (5) 過去を引きずる差別の問題

- ① 1960年代になって、キング牧師などの黒人人権運動が起こりました。それまでの黒人差別は改善され、学校、バス、トイレなど是一緒になりましたが、それでも白人の心の中の差別感は、なかなか消えないようです。最近でも白人警官の黒人に対する射殺事件や暴力事件が報道されていますが<sup>14) - 16)</sup>、事件のきっかけは白人の黒人への人種差別や偏見による部分が多いと考えられます。そうした事件が起こっているのは、やはりアメリカの南部が多いのです。

#### 2. B群（お話は2度読んでくださいと指示）

A教示文と共通部分の他に、「三角貿易という言葉を知っているか」と「南北戦争の結果」の間に、以下のような(4)「サトウキビと綿花の栽培と黒人奴隷」の項目で「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量」（四角で囲った部分）が記されている。

##### サトウキビと綿花の栽培と黒人奴隷

##### ●サトウキビ栽培（西インド諸島）

###### (a) サトウキビから砂糖を採り出す手順

・ 植え付け ⇒ サトウキビの刈り入れ ⇒  
 砕いてジュースを絞る ⇒ ジュースを煮詰める  
 ⇒ 蒸留し結晶させる ⇒ 船積みする

###### (b) 栽培に適した気温、降水量

・ 1年を通して25～28度位、降水量は1300～1500ミリ（東京は2000ミリ）

###### (c) どこが大変か

・ 砕いてジュースを絞る ⇒ ジュースを煮詰める

暑い工場です早く大量に処理する作業がポイントとなる。（暑さと重労働で倒れ、死ぬ奴隷が出てくる）

##### ●綿花栽培（アメリカ合衆国南部）

###### (a) 綿（ワタ）にする手順

・ 種まき ⇒ 畑の管理 ⇒ 綿摘み ⇒  
 綿と種の分離 ⇒ 綿の洗浄 ⇒ 船積みする

###### (b) 栽培に適した気温、降水量

・ 気温が高いところで霜が降らない期間が長いところ、22～27度で降水量は600～1300ミリ（東京は2000ミリ）

###### (c) どこが大変か

・ 綿摘み ⇒ 綿と種の分離 その時期に素早く大量に処理する作業がポイントとなる。（炎天下の仕事が延々と続き体力はなくなり、死ぬ奴隷が出てくる）

●両者の黒人奴隷の共通の問題

- ・ アフリカから西インド諸島の島やアメリカ南部に強制的に連れてこられた。
- ・ 大量にその地域に黒人奴隷が投入された。
- ・ 仕事（収穫時など）で健康を害しても、人間的な扱いはされなかった。
- ・ 黒人奴隷が死ぬと、新しい黒人奴隷を買って来て働かせた。

(6) 結果の分析について

- ① 課題を大きく3つの分野に分ける。
  - A) 「三角貿易までの歴史課題」(8課題): 「教皇分界線」「インカが減じた原因」「人口が減った割合」「スペインが奴隷にした理由」「イギリスが奴隷にした理由」「イギリスが黒人狩りをした方法」「奴隷船の環境」「三角貿易とは」
  - B) 「アメリカ現代史課題」(7題): 「アメリカの綿花栽培地域」「南北戦争の結果」「現在の差別事件の地域」「60年代のバスやトイレの使用別」「綿花栽培地域での黒人の扱い」「サトウキビ作業の黒人の取り扱い」「綿花作業の黒人の取り扱い」
  - C) 「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量課題」(6題): 「サトウキビ工程の難しい部分」「サトウキビの適正気温」「サトウキビの適正降水量」「綿花栽培工程の難しい部分」「綿花栽培の適正気温」「綿花栽培の適正降水量」
- ② 各課題の正反応を1点、誤反応を0点として処理する。事前と事後ごとのA群とB群の平均値及び平均値の差の検定(t検定)、各群の事前から事後への平均値の伸びの検定によって結果の効果を判定する。
- ③ 日本人の差別感の考え方については、「話し合えば分かり合える」という思想とそれに類するものを1点とし、その反応の減少の結果によって効果を判定する。

(7) 仮説

- A) 黒人差別の歴史認識について
  - ① 総得点では、B群が「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量課題」分野の得点が高くなってA群を凌駕するだろう。(表1-1)
  - ② 分野別得点では、「三角貿易までの歴史課題」「アメリカ現代史課題」「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量課題」各分野において、B群がA群より正反応率の伸びが大きだろう。特に「サトウキビと綿花の工程と適正温度と降水量課題」分野の正反応率の伸びは、学習したB群がし

ないA群を大きく凌駕するだろう。(表1-2)

- ③ 「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量」の学習を行ったB群の方が、事前から事後への正反応率の伸びで、A群に較べて転移課題である「三角貿易までの歴史課題」「アメリカ現代史課題」で効果を示すだろう。(表2-1)
  - ④ 事後の「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量課題」の得点を上中下群に分けた場合、他の2課題との関係では、A群B群で上位群の伸びが大きだろう。(表3-1)
  - ⑤ 「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量課題」分野で、「サトウキビ工程」の学習結果が分野内の他課題に転移するかでは、A群はそれを直接学習したB群程には転移しないだろう。(表4-1)
  - ⑥ 「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量課題」分野で、事前の「サトウキビ工程」の「正」「誤」の違いでは、「正」反応の方が分野内の他課題へ転移が大きだろう。(表4-2)
- B) 日本人の差別感について
- ① 「白人の黒人差別は10年以内になくなるか」では、事前と事後でA群B群間に減少の差は見られないだろう。またA群B群共に事前から事後への反応の減少は見られないだろう。(表5-1)
  - ② 「その理由」についても、事前と事後でA群B群間に減少の差は見られないだろう。また事前から事後への減少は見られないだろう。(表5-1)
  - ③ 教示文の3課題への転移については、A群B群共に転移は起こらないだろう。(表5-2)

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. A群B群間の得点結果について

##### 1-1. A群B群間の総得点の平均とt検定

教示内容に該当する21課題に対して、各課題の正反応を1点として、その総得点の平均値を群別に示したものが表1-1である。

表1-1によれば、

事前のA群B群間に差は見られないが、事後でB群が有意に高くなっている。このことからB群がA群に較べて効果があったことを示している。但しA群B群共に事前から事後への学習効果は見られており、より効果があったのはB群であることがわかる。但し事後の正反応率が75.5%であることから、目標設定の在り方によってはB群も効果があったとは言えないことになる。



表 1-1 A群B群間の総得点の平均と t 検定

全分野	調査	群 (教示文)	平均値 (%)	群	事前から 事後への伸び (%)	群間の有意 確率 (上事 前 下事後)	事前から 事後への 有意確率
総得点 (21点)	事前	A	10.42 (49.1)	A	12.5		※※
		B	9.93 (47.2)				
	事後	A	12.93 (61.6)	B	28.3	※※	※※
		B	15.86 (75.5)				

※は5%水準、※※は1%水準 (以下の表も同じ)

表 1-2 A群B群間の分野別得点の平均と t 検定

分野別	調査	群 (教示文)	平均値 (%)	群	事前から 事後への伸び (%)	群間の有意 確率 (上事 前 下事後)	事前から 事後への 有意確率
三角貿易までの 歴史課題 (8点)	事前	A	3.44 (43.0)	A	14.5		※※
		B	3.47 (43.3)				
	事後	A	4.60 (57.5)	B	17.7		※※
		B	4.88 (61.0)				
アメリカ現代史 課題 (7点)	事前	A	4.56 (65.1)	A	11.3		※※
		B	4.23 (60.4)				
	事後	A	5.35 (76.4)	B	21.3		※※
		B	5.72 (81.7)				
サトウキビと 綿花の工程と 適正気温と 降水量 (6点)	事前	A	2.42 (40.3)	A	8.5		※
		B	2.23 (36.5)				
	事後	A	2.93 (48.8)	B	51.1	※※	※※
		B	5.26 (87.6)				

## 1-2. A群B群間の分野別得点の平均と t 検定

課題群を3つの分野に分けてその効果を検討する。「三角貿易までの歴史課題」(8点)、「アメリカ現代史課題」(7点)、「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量課題」(6点)の3分野別の得点を示したものが表1-2である。

表1-2によれば、

- ①「三角貿易までの歴史課題」(8点)では、事前と事後のそれぞれで、A群B群間に有意差は見られなかった。また事前から事後への変化で、A群B群で共に有意な変化を示している。その点で学習されたことを示している。しかし、事前から事後への正反応率の変化(A群14.5%、B群17.7%の伸び)は高いとは言えないものの、ややB群の方が高い傾向が認められる。
- ②「アメリカ現代史課題」(7点)では、事前と事後のそれぞれで、A群B群間に有意差は見られなかった。また事前から事後への変化については、A群B群で共に有意な変化を示している。その点

では学習されたことを示している。事前から事後への正反応率の変化(A群11.3%、B群21.3%の伸び)で、B群の方が学習効果があったことを示している。

- ③「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量課題」(6点)では、事前でのA群B群間に有意差は見られなかったが、事後でB群がA群を有意に凌駕している。これは当然な結果であり、A群はサトウキビの工程だけを学習したのに、B群ではこの分野の内容全てを教示され学んだことによるからだと考えられる。また事前から事後への変化については、A群B群で共に有意な変化を示している。その点ではA群でも学習されたことを示している。事前から事後への正反応率の変化(A群8.5%、B群51.1%の伸び)では、B群の方が断然正反応率が高く、直接教示内容を学習した結果によるものである。

## 2. 転移課題の結果について

## 2-1. 「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量」の学習が、他の2課題に転移したか

表2-1は、表1-2の「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量」の部分を除いたものである。

表2-1によれば、

①「三角貿易までの歴史課題」(8点)では、A群では事前(43.0%)から事後(57.5%)にかけて14.5%の伸びなのに対して、B群では事前(43.3%)から事後(61.0%)にかけて17.7%の伸びとなっている。数値的にはこれらの伸びには有意差は認められないが、A群よりB群の方が効果があったことを予想させるものである。

②「アメリカ現代史課題」(7点)では、A群で事前(65.1%)から事後(76.4%)にかけて11.3%の伸びなのに対して、B群では事前(60.4%)から事後(81.7%)にかけて21.3%の伸びとなっている。数値的にこれらの伸びに有意差は認められないが、A群よりB群の方が効果があったことを予想させるものである。

これらの結果から、事後の正反応率の高さと事前から事後への伸びでは、B群がA群を凌駕しており、「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量」の学習が、他の2課題に転移した可能性が認められる。

## 3. 「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量課題」の事後得点の上中下群と他の2課題分野の結果との関係

そこで、「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量課題」(6点)の事後の得点を上中下群に分けて2課題の結果との関係を見たものが表3-1である。なお上位群は(5~6点)、中位群は(3~4点)、下

位群は(0~2点)とした。

表3-1によれば、

①A群では「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量課題」(6点)の上位群の数は少なく5/43に過ぎない。それに対して中位群は21/43、下位群は17/43となっている。これら3群のうち、「三角貿易までの歴史課題」(8点)「アメリカ現代史課題」(7点)のどちらも効果があったのは中位群である。事前から事後への正反応率の伸びでは、「三角貿易までの歴史課題」で18.5%、「アメリカ現代史課題」で15.5%と一番大きくなっている。また事前から事後への変化で有意差が認められ、中位群の効果があったことを示している。

②B群では「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量」(6点)の内容が教示されており、36/43が上位群となっている。この上位群が事前から事後への反応率の伸びでは、「三角貿易までの歴史課題」が24.6%、「アメリカ現代史課題」が23.4%と一番大きくなっている。また事前から事後への変化は有意となっており、効果があったことを示している。中位群はA群の中位群に較べると、やや低率傾向が見られる。また下位群は1名だけでマイナスとなっている。

これらから、A群では「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量」の学習の中位群が効果的であったのに対して、B群では上位群が効果があった。事前から事後への伸びの変化の差はB群の上位群がA群の中位群より大きく、2課題分野に対してA群より効果があったと予想される。これらの結果から、B群の上位群のように「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量」分野の学習が進めば、「三角貿易までの歴史課題」(8点)、「アメリカ現代史課題」(7点)にまで、転移する可能性が大きいことを示している。

表2-1 「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量」学習の他の2課題への転移結果

分野別	調査	群 (教示文)	平均値 (%)	群	事前から 事後への伸び (%)	群間の有意 確率 (上事 前 下事後)	事前から 事後への 有意確率
三角貿易までの 歴史課題 (8点)	事前	A	3.44 (43.0)	A	14.5		※※
		B	3.47 (43.3)				
	事後	A	4.60 (57.5)	B	17.7		※※
		B	4.88 (61.0)				
アメリカ現代史 課題 (7点)	事前	A	4.56 (65.1)	A	11.3		※※
		B	4.23 (60.4)				
	事後	A	5.35 (76.4)	B	21.3		※※
		B	5.72 (81.7)				

表3-1 「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量課題」の事後得点群別の2課題の結果

群	課題	上中下群	N	平均値		事前から事後へ伸び(%)	事前から事後への有意確率
				事前(%)	事後(%)		
A群	三角貿易までの歴史課題(8点)	上位(5~6)	5	3.2(40)	3.6(45)	5.0	
		中位(3~4)	21	4.0(50)	5.48(68.5)	18.5	※※
		下位(0~2)	17	3.35(41.8)	3.82(47.7)	5.9	
	アメリカ現代史課題(7点)	上位(5~6)	5	4.6(65.7)	4.6(65.7)	0.0	
		中位(3~4)	21	4.67(66.7)	5.76(82.2)	15.5	※※
		下位(0~2)	17	4.41(63)	5.06(72.2)	9.2	
B群	三角貿易までの歴史課題(8点)	上位(5~6)	36	3.0(37.5)	4.97(62.1)	24.6	※※
		中位(3~4)	6	4.0(50)	4.83(60.3)	10.3	
		下位(0~2)	1	4.0(50)	2.0(25)	-25.0	
	アメリカ現代史課題(7点)	上位(5~6)	36	4.19(59.8)	5.83(83.2)	23.4	※※
		中位(3~4)	6	4.5(64.2)	5.5(78.5)	14.3	
		下位(0~2)	1	4.0(57.1)	3.0(42.8)	-14.3	

表4-1 「サトウキビの工程」の学習が「綿花の工程とサトウキビと綿花の適正気温と降水量」に転移するか

課題	調査	群(教示文)	平均値(%)	群	事前から事後への伸び(%)	群間の有意確率(上事前 下事後)	事前から事後への有意確率
サトウキビの工程(1点)	事前	A	0.19(19.0)	A	65.0		※※
		B	0.12(12.0)				
	事後	A	0.84(84.0)	B	82.0	0.08	※※
		B	0.94(94.0)				
綿花の工程とサトウキビと綿花の適正気温と降水量(5点)	事前	A	2.23(44.6)	A	-2.8		
		B	2.09(41.8)				
	事後	A	2.09(41.8)	B	44.2	※※	※※
		B	4.30(86.0)				

またA群では中位群の方が上位群より効果的であった理由は、被験者数の多少の違いと、上位群の2課題への関連性を持たない一般的な孤立した認識の持ち方による可能性も考えられる。中位群に較べて上位群は保持している孤立した認識を新たな学習分野に関連させるのに混乱させるように働いた可能性があったことが考えられる。

#### 4. 事前の「サトウキビの工程課題」結果の「綿花の工程とサトウキビと綿花の適正気温と降水量課題」への転移結果

##### 4-1. 「綿花の工程とサトウキビと綿花の適正気温と降水量」への転移結果

A群では「サトウキビの工程」についての教示が行われた。その学習が「綿花の工程、サトウキビと綿花の適正気温と降水量課題」まで転移するかどうかを検

討する。「サトウキビの工程」を1点として、分野内の他の課題(5点)について検討する。その結果を示したものが表4-1である。

表4-1によれば、

①「サトウキビ工程課題」については、事前でA群とB群間で有意差はなかった。事後ではB群の方がやや高い傾向が見られる。事前から事後への変化では、両群ともに学習効果が認められて有意となっている。

②A群B群の「綿花の工程とサトウキビと綿花の適正気温と降水量課題」(5点)の結果を見ると、事前でA群B群間に有意差は見られなかったが、事後では有意差が見られた。B群の結果の伸び(44.2%)がA群の伸び(-2.8%)を大きく凌駕している。A群では負の転移が起こっている。これらの結果から、A群の「サトウキビの工程」に



表4-2 「サトウキビの工程」の正誤別による分野内の他課題へ転移結果

課題	群	調査	サトウキビの 工程課題	N	平均値 (%)	正誤	事前から 事後への伸び (%)	群間の有意 確率 (上事 前 下事後)	事前から 事後への 有意確率
綿花の工程と サトウキビと 綿花の適正気温 と降水量課題 (5点)	A	事前	正反応 1	8	2.0 (40.0)	1	10.0	0.31	0.407
			誤反応 0	35	2.29 (45.8)				
		事後	正反応 1	8	2.5 (50.0)	0	-5.8	0.91	0.115
			誤反応 0	35	2.0 (40.0)				
	B	事前	正反応 1	5	1.6 (32.0)	1	52.0	0.917	0.00※※
			誤反応 0	38	2.16 (43.2)				
		事後	正反応 1	5	4.2 (84.0)	0	43.2	0.724	0.00※※
			誤反応 0	38	4.32 (86.4)				

についての学習結果が「綿花の工程とサトウキビと綿花の適正気温と降水量課題」(5点)へと転移した可能性は全くなかったか、負の転移が生じた可能性がある。

#### 4-2. 「サトウキビの工程課題」の事前の「正」

「誤」別による分野内の他課題への転移結果  
そこで、事前で「サトウキビの工程課題」の結果の「正」「誤」別の「綿花の工程とサトウキビと綿花の適正気温と降水量課題」分野内への転移が生じたかどうかを見たものが、表4-2である。

表4-2によれば、

①A群では事前と事後のそれぞれで、「正」「誤」間で有意差は見られなかった。また事前から事後にかけての変化についても有意差は見られなかった。また「誤」では事後で得点が低くなっており負の効果を示している。事前から事後への伸びを見ると、「正」の方が「誤」に較べて15.8%高い傾向が見られ、転移力が大きいことを示している

①B群でも事前と事後のそれぞれで、「正」「誤」間で有意差は見られなかった。事前から事後にかけては「正」「誤」共に有意な変化が認められた。これらは転移というよりは、この分野の学習によるものと考えられる。事前から事後への伸びを見ると、A群より得点が高いが、「正」の方が「誤」に較べて9%程高くなっている。

これらの結果から、「サトウキビの工程課題」のA群B群の「正」「誤」の違いによる結果では、A群B群共に「正」の方が「誤」に較べて高い傾向が見られる。また「正」「誤」間での伸びの差ではA群の方がB群よりは大きい傾向が見られ、A群の「正」反応者の転移力が「誤」反応者に較べて大きいことを示している。

#### 5. 「日本人の差別感」の変化

「日本人の差別感」の変化をしてみる。日本人は「話し合えば分かり合える」という楽観的でプリミティブな差別感を持っている可能性があり、その反応が教示文によって減少するかどうかを検討する。

##### 5-1. 「白人の黒人に対する差別は10年以内になくなるか」の結果

選択肢の「なくなる」の減少が生じるかを指標とする。「なくなる」を1点、「なくなるしない」を0点とし、その結果を示したのが表5-1である。

表5-1では、

①事前と事後の両群間には有意な差は見られない。

事前から事後への変化(選択肢の減少)では、A群では1%水準での有意な減少が見られた。またB群においても5%水準での有意な減少が見られた。A群B群で20%前後減少しているものの、A群の方が日本人の差別感を減少させるのにやや効果的な傾向が見られる。

この課題は二者選択課題であり、結果的に「なくなるしない」の選択肢が増えたことを示している。アメリカにおける黒人差別の問題は一朝一夕には解決しえない問題であることの理解は得られ、日本人の「話し合えば分かり合える」という考え方に対する一応の歯止めがかかったことを示している。

##### 表5-1 「そう考える理由」

その理由について「白人も黒人も同じ人間なのだから、分かり合える日が必ず来るから」という考え方が減少するかどうかを見る。「白人も黒人も同じ人間なのだから、分かり合える日が必ず来るから」の選択を1点、他の選択を0点として、それらの結果を示したものが表5-1である。

表5-1 白人の黒人差別は10年以内になくなるかとその理由の結果

課題	調査	群 (教示文)	平均値 (%)	群	事前から 事後への減少 の伸び (%)	群間の有意 確率 (上事 前 下事後)	事前から 事後への 有意確率
白人の黒人差別 は10年以内に なくなるか	事前	A	0.35 (35.0)	A	23.0		※※
		B	0.37 (37.0)				
	事後	A	0.12 (12.0)	B	18.0		※
		B	0.19 (19.0)				
その理由	事前	A	0.28 (28.0)	A	19.0		※
		B	0.35 (35.0)				
	事後	A	0.09 (9.0)	B	21.0		※※
		B	0.14 (14.0)				

表5-2 日本人差別感の3課題合計の減少結果

課題	調査	群 (教示文)	平均値 (%)	群	事前から 事後への減少 の伸び (%)	群間の有意 確率 (上事 前 下事後)	事前から 事後への 有意確率
日本人差別間の 3課題合計	事前	A	0.88 (29.3)	A	2.3		
		B	0.93 (31.0)				
	事後	A	0.81 (27.0)	B	4.0		
		B	0.81 (27.0)				

①事前と事後でそれぞれA群B群間には有意差は見られなかった。また事前から事後への変化では、A群が5%水準で有意に減少している。またB群でも1%水準で有意に減少している。このように「白人も黒人も同じ人間なのだから、分かり合える日が必ず来るから」という選択肢は20%減少しており、日本人の差別感に対して一応歯止めがかかっている。この事前から事後への減少では、B群がA群よりやや減少傾向が大きい、大きな差ではない。他選択肢のどれを選択したかについては、今回検討していない。

これらのことから、白人による黒人への社会的差別は簡単にはなくならないのではないかという考え方が増加した可能性が示されている。単純に「話せばわかり合える」という楽観的でプリミティブな思想は、他民族との軋轢が余りなかった（アイヌや琉球民族の問題があるにしても）歴史的背景によって生み出されたものではないか。世界の宗教や民族対立が他人事としか見えない日本の歴史があればこそ、このような差別感が醸成されてきたのではないかと思われ、社会差別の多くの現状や歴史を学ぶことによって、日本人の差別感を変化させる可能性があることが示されている。

表5-2 日本人差別感の3課題合計の転移結果  
そこで「白人警官の黒人への暴力や射殺事件はなくせるか」課題、「日本人が黒人差別をなくすにはどうするか」課題、「黒人を差別している白人にどう働きかけるか」課題の3課題を纏めて、日本人の差別感が減少したかを示したものが、表5-2である。

それによれば、

①事前と事後共に、A群とB群間に有意差は見られない。また事前から事後への減少差では、ややB群の方が減少差が大きい傾向が見える。

これらの結果から、これらの転移課題ではA群とB群共に日本的な楽観的なプリミティブな差別感の減少が「白人の黒人に対する差別は、10年以内になくなるか」の減少差に較べると小さくなく、転移が生じたとは言えない結果となっている。しかし相対的に見ると、B群の方がA群に較べてやや減少傾向が見られ、自然条件教示による学習が正の転移をさせた可能性を示すものである。

#### IV. 仮説の検討

##### A) 黒人差別の歴史認識について

①総得点ではB群が予想通りA群を事後で凌駕した。これは「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量課題」の分野の得点の違いから生じた可能性

がある。これらのことから仮説A) ①は支持される。

- ②分野別得点では、「三角貿易までの歴史課題」「アメリカ現代史課題」「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量課題」の3分野共に、B群がA群を凌駕している。「三角貿易までの歴史課題」「アメリカ現代史課題」の2分野については有意に凌駕している訳ではないが、事前から事後への正反応率の伸びで共に凌駕していることから、その傾向があると言えよう。また「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量課題」分野は、仮説通りB群は学習しておりA群は学習していないので、そのことが得点差に繋がったと考えられる。これらのことから仮説A) ②は支持される。

- ③「三角貿易までの歴史課題」「アメリカ現代史課題」分野の得点の様相は、「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量課題」分野の学習の転移課題であると考えている。その結果を見るとB群がA群を凌駕している。但しその事前から事後への伸びの差は有意なほどではない。しかし2分野共にB群が優勢となっていて、転移した結果と考えられる。これらのことから仮説A) ③は支持される。

- ④事後の「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量課題」の得点を上中下群に分けた他の2課題との関係では、A群B群共に上位群の伸びが大きいと予想したが、B群では上位群の方が良かったが、A群では中位群の方が良かった。そのことから仮説A) ④は一部支持されるに過ぎない。

- ⑤「サトウキビ工程」のA群の学習が、「綿花の工程とサトウキビと綿花の適正気温と降水量課題」(5点)にB群ほどに転移するかについては全く転移しなかった。逆に事前から事後でマイナスの結果を示している。これらのことから仮説A) ⑤は支持される。

- ⑥「サトウキビ工程」の事前の「正」「誤」の違いによって、分野内の「綿花の工程とサトウキビと綿花の適正気温と降水量課題」(5点)に転移することが考えられたが、A群B群共に「正」の方が「誤」に較べて伸びがやや高い傾向が認められた。これらのことから仮説A) ⑥は支持される。

#### B) 日本人の差別感について

- ①「白人の黒人差別は10年以内になくなるか」課題では、「なくなる」の減少が、事前から事後への変化でA群B群共に有意に減少している。事前から事後への減少の伸びではA群の方が減少傾向が大きい。これらのことから仮説B) ①は支持され

ない。

- ②「そう考える理由」についても、「白人も黒人も同じ人間なのだから分かり合える日が必ず来るから」という考え方の減少は、事前と事後でのA群B群間では有意差はなかったものの、事前から事後への変化でA群B群共に有意に減少している。またその減少の伸びではB群がA群よりやや減少傾向が大きい、それほど大きな差ではない。これらのことから仮説B) ②は支持されない。

- ③日本人の差別感が「白人警官の黒人への暴力や射殺事件はなくせるか」課題、「日本人が黒人差別をなくすにはどうするか」課題、「黒人を差別している白人にどう働きかけるか」課題の「3課題合計」に転移するかでは、事前と事後間、A群B群それぞれの事前から事後への変化では有意差は認められなかった。しかしB群の方がA群よりやや減少傾向が認められ転移しやすい可能性を示している。これらのことから仮説B) ③は支持されない。

## V. 討論

### 1. 自然科学概念に属する自然条件の教示効果について

前研究では共通の教示内容の他に、黒人差別の歴史を教示した(前A)群と自然科学概念に関わる内容を教示した(前B)群との学習効果の比較を行った。その結果、(前A)群の方が対応する課題ばかりでなく、(前B)群に対応する課題に対しても、ほぼ同等の結果を示した。本研究では自然科学概念に属する自然条件に関わる「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量課題」(6点)分野を教示されたB群の方が、「サトウキビの工程」のみで黒人差別の歴史を中心に教示されたA群に較べて、有意差はなかったものの「三角貿易までの歴史課題」(8点)「アメリカ現代史課題」(7点)で優勢な傾向を示して転移可能性を示した。前研究の結果とは逆になっている。

その違いは、前研究では「プランテーション」「栽培方法」「サトウキビから何を採り出すか」などの自然科学分野における一般認識についての学習が主だったのに対し、本研究ではサトウキビや綿花の栽培のための詳しい工程やその難しさ、その栽培に適した気温や降水量と黒人の状況を具体的に提示している。この情報は奴隷として使役された黒人たちがその土地に縛られた条件そのものである。前研究の「栽培方法」「サトウキビから何を採り出すか」という黒人労働の困難さを示したものに較べると、そこでしか生きられない、そして逃れられない黒人たちの生活を現実のも



のとして想像させるに十分な条件だった可能性がある。この情報によって黒人たちの過酷さとその生活を一層現実的なものとして、つまり臨場感を感じることができたのではなかろうか。

このように単なる自然科学概念についての情報提示よりは、黒人が奴隷として扱われるようになった歴史的過程に絡んで自然条件を教示した点で、本研究のB群がA群より効果があったのではないかと考えられる。このことから自然条件（概念）を単に教示すれば正反応を引き起こせるというよりは、黒人の奴隷に関する歴史を理解させるために、そうやってきた必然性を自然条件との関連でどう関係づけるか、つまり課題関与をどうさせるかによって、自然条件の教示による学習が効果的になるかどうかが決まってくるのではないかと考えられる。

## 2. 自然認識と社会認識との関連について

自然認識と社会認識間の関わりについて、問題提起の部分でも述べたように、日本の社会や学校教育では別々に孤立したものとして教育してきたし、今でもそうしている。その結果として理科系とか文科系という言い方が当たり前のことになっている。そうした教育の結果は、文科系の方が理科系の分野を苦手だと分からないからという理由で、その理科系の領域を学ぼうとしないことが起こる。また逆に文科系領域に関して、理科系の人たちが複雑で分かり難いと考えて理解しようとしないう風潮さえ感じる。加えて社会では、数学的な能力こそが論理性を伴う故に頭が良いのだというコンテンツフリーに評価する馬鹿げた風潮さえ見られる。自然科学系の学問分野は主に自然相手人間をだますことも少ないことから、社会科学系に較べて相対的に単純な論理の組合せによって、解答を得られる可能性があるのに対して、社会科学系の分野は扱う条件が多様で複雑なので、正解がどれか判別できないことも多い。そんな理科系と文科系領域の特徴が、学習者の認識体系の様相の違いとして形成され、それぞれが偏ったままの認識になっているように思われてならない。

前研究と本研究の結果は、前研究で黒人の社会的差別の歴史の学習が、自然認識に対応する「プランテーション」「栽培方法」「サトウキビから何を取り出すか」等の自然科学分野に転移する可能性が見られたし、本研究では逆に自然科学概念の領域に関する学習が、黒人差別の社会的歴史に関わる「三角貿易までの歴史課題」や「アメリカの現代史課題」に転移する可能性さえ認められる結果となっている。こう考えると、日本の学校教育の弊害である自然認識と社会認識を別々

なものとする教育や学習方法を改めるためにも、これらの認識が相互に行き来するような学習をさせることが必要ではなかろうか。このことは日本人の差別感の改善にとって、B群が「3課題合計」の転移課題にやや効果が見られたことから分かるように、我々の持つ広く深い背景（バックグラウンド）を持った認識を持たせることが、学習者が直面する課題場面で有効に働く学力に通じる根源となるのではなかろうか。その点では、前研究と本研究では、社会認識と自然認識が有効に転移し合える、つまり総合的認識構造を持つことができる可能性を示したということができる。

## 3. 事後の「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量課題」得点の上中下群別と他の2課題分野との関連について

事後の「サトウキビと綿花の工程と適正気温と降水量課題」の得点の上中下群別の他の2課題の結果との関連は、A群では中位群が事前から事後の正反応率の伸びが大きく、事前から事後への変化でも有意差を示した。B群では上位群の伸びが大きく、事前から事後への変化でも有意差を示した。なぜこのような違いが生じるのだろうか。一般的に考えれば、A群の上位群もB群の上位群同様に、2課題分野に対して優勢になって良い筈である。A群の上位群とB群のそれとの間の違いには、次のようなことが考えられる。

一つは該当する被験者の数の違いである。A群では5名に過ぎないがB群では36名となっている。これらの数の偏りが大きいことが、こうした結果をもたらした可能性がある。もう一つは、A群の教示内容は「サトウキビの工程」についてだけの学習であり、その結果の上位群である。その課題を正反応しているものの、その黒人の奴隷の問題と自然条件を関連させるには被験者自身が心理操作を行わなければならない。それに較べると、B群の上位群では自然条件と黒人奴隷の関連を直接学んだことによる2課題分野の成績となっている。

そこでなぜA群の中位群の成績が上位群を凌駕したのかという問題がある。上位群は既に持っている自然認識と黒人の奴隷の歴史の認識が交錯して混乱した可能性があるのに、中位群ではその混乱する可能性が低かったことが、上位群よりも事前から事後への正反応率の伸びが高かった可能性がある。言ってみれば、中途半端な認識の持ち方をしていた上位群はそれらを整合的にまとめることができない認識の持ち方、つまり断片的な認識の持ち方をしていたことによって関連させられず混乱が起こったのに対し、中位群の方はそれほど認識を持たなかったために、却って結果的に混

乱を避けることができたのではないか。

こう考えると、単なる被験者数の多少というよりは、認識の在り方が断片的な状態でありながら物知りである上位群は他の2課題分野に解答するのに混乱が生じたのに、中位群ではそうした混乱が少なく、2課題分野を学習したことが考えられる。このことから下手な知識の持ち方は却って新たな認識の形成にマイナスになる可能性があることを意味している。認識構造に対して、内的関連をさせながら学ばせることの必要性和意義が、この事実を通して言えるのではないだろうか。

#### 4. 「サトウキビの工程課題」の事前の「正」「誤」別による分野内の他課題への転移可能性について

「サトウキビの工程」の「正」「誤」の様相が、分野内の「綿花の工程とサトウキビと綿花の適正気温と降水量課題」に転移するかについて、A群の結果からは「正」の方が「誤」に較べて事前から事後への伸びで転移可能性が大きいことが示された。B群の方は「綿花の工程と適正気温と降水量課題」について学習しているので「正」「誤」共に高得点となっている。それでも「正」の方が「誤」に較べて高くなっている。A群ではその差が15.8%とB群の8.8%に較べて高く、事前に「サトウキビ工程」に正解できる「正」学習者の認識の在り方が、その後の「綿花の工程と適正気温と降水量課題」の学習を促進するための条件を満たしている可能性を予想させる。単なる「サトウキビの工程」の知識の有無というよりは、それらを支える認識構造の存在が分野内の「綿花の工程とサトウキビと綿花の適正気温と降水量課題」の学習を高めるということである。

しかし、A群の「正」の伸びの大きさがあるにしても、直接「綿花の工程とサトウキビと綿花の適正気温と降水量課題」の学習を行ったB群に較べると正反応率の伸びは低く、十分な転移が生じたとは言えない結果となっている。このようにA群の「正」の方が「誤」に較べて転移力が大きいものの、直接学習したB群ほどには高率とならなかったことになる。事前のA群の「正」反応者の保持するこれらの分野の認識内容を事前に把握し、教示方法と内容を考慮した上で教示文を作成すれば、より転移力を高めることができるようになるかもしれない。今後の課題と言えよう。

この転移の問題は、討論3の上中下群の他の2課題分野との関連の問題と併せて考える必要がある。A群の上位群は他の2課題分野との関連（転移）で効果がなかったのと較べて、「サトウキビの工程」の事前の「正」「誤」別の「正」では同一分野に転移可能性が

見られた。このことから学習した内容が転移するには、学んだ内容との距離の違いがあるのではないかと考えられる。実質陶冶では共通な内容が含まれている場合には転移すると考えるのに、形式陶冶では内容フリー（コンテンツ・フリー）に転移すると考える。今回の結果も、そうしたことの一例のように思われる。「サトウキビの工程」の「正」反応者は「綿花の工程とサトウキビと綿花の適正気温と降水量」とほぼ内容が近いから転移したのに対し、A群の上位群では他の2課題分野との内容が違っていたから、転移しなかったのではないか。

そう考えると、A群の上位群が他の2課題分野に転移できるようにさせるためには、内容を関連させたり、その必然性を持たせたりすれば転移可能性を高められるのではないか。これは討論3で述べたことと同じである。

#### 5. 日本人の楽観的でプリミティブな差別感の減少について

日本人が持っている「同じ人間同士なのだから、話し合えば分かり合える」という考え方は、世界中の民族対立や宗教対立に対して通用するものなのだろうか。黒人差別の歴史を見ると、アメリカでの黒人差別の問題は話し合えば分かり合えるというような単純なレベルの問題ではなく、何世代にもわたって行われてきた差別の歴史の中で、黒人と白人が憎しみ合う感情や情操のレベルにまで入り込んだ複雑な問題となっている。

黒人の社会的差別の歴史を学ぶことによって、被験者である学生たちが、自分の中にある「楽観的でプリミティブな差別感」つまり「同じ人間同士なのだから、話し合えば分かり合える」という考え方は減少するのではないかと考えたのであるが、「白人の黒人への差別は10年以内になくなるか」に対しては、A群の方がB群より減少傾向が見られた。ある意味では、社会的な差別の歴史を学んだA群は、その解決の困難さを直接に学んだ可能性が高い。それに対してB群はそれよりは間接的に学んだ可能性があり、その結果として、A群の減少傾向が高くなっているのではないかとと思われる。

しかし、「そう考える理由」及び転移課題である「3課題合計」の結果を見ると、傾向として、逆にB群の方がA群よりやや減少傾向が見られる。このことをどう考えたら良いのだろうか。B群の学習は、黒人差別の直接的な問題を取り上げたA群よりは、自然条件を含めた自然認識によって判断されている可能性がある。広く深い背景を持った認識による判断によって、日本人の「楽観的でプリミティブな差別感」が減少し

た可能性がある。そう考えると、自然条件を含めた自然認識も含めた認識を持たせようとするB群は、A群のような直接的な教示内容によって判断させるよりも、幅広い視点からの判断となっている。譬えてみれば即効性の薬なのか、遅効性の薬なのかというようなことである。こう考えると、学校教育とはそこで学んだことを繰り返せばよいということではなく、学習者である子どもや学生たちが、人生の中で直面する課題場をクリアさせるための教授であるべきであり、転移するような認識を持たせることが必要である。その点でB群の認識の持ち方がA群の認識よりは、転移可能性が大きいのではないと思われる。しかしながらこの傾向はA群B群間で有意差がある訳ではなかった。だがこうした認識を持たせることで、黒人差別の教示文に直接つながる問題を越えた、人種差別や民族差別及び性差別等の応用問題とも言える他の課題にも転移する可能性を高めることができるかも知れない。

## VI. 終わりに

本研究の結果から、「サトウキビと綿花の工程と気温と降水量の自然条件」が「黒人奴隷の誕生の歴史」の理解にとっての必然性の1つであり、その結果「三角貿易までの歴史課題」「アメリカ現代史課題」の歴史の理解にまで転移した可能性が認められた。学習者の適切な認識形成のためには、黒人奴隷が生み出されるようになった自然条件についても学ばれるべきだし、そうやってきた論理をきちんと教示することが必要であろう。本研究の結果は、自然認識と社会認識を区別し分けることそのものが意味をなさないことを示しているのではないかな。

前研究では学習者の社会認識が自然認識分野にまで転移する可能性があったことを示していたが、本研究ではその逆もあり得ることが示された。その点で、総合的な認識とは何か、その効用とは何かについて、今後具体例を介して検討することが必要であろう。

また日本人の「差別感」は、世界の歴史的な視点から見れば、幼稚で楽観的なプリミティブな差別感だと考えられる。島国で極東に位置し他民族との大きな軋轢が殆どなかった歴史によって醸成された文化によるものが大きいように思われる。「話し合えば分かり合える」という思想は人の性向についての性善説によるものと考えられ、そうした思想はいくつかの思想の1つに過ぎない。日本の民主主義についても、こうした傾向が見られる。我々は制度として多数決が当然であると考えているが、全ての人間が見識や常識があり、そうした人たちの相互意見の交流の結果として、多数決が行われる筈のものである。多数決制度を採用する

ことが民主的であると無前提に考えてしまっている日本人の平等感も、日本人の幼稚で楽観的なプリミティブな差別感と同様なものではないかと考えてしまう。

## 引用文献と註

- 1) 沖浦和光「竹の民族誌 日本文化の深層を探る」岩波新書 1991.9 pp208～218
- 2) 新村出他「広辞苑 第4版」岩波書店 1991.11 pp281
- 3) 藤川隆男「人種差別の世界史」刀水書房 2011.7
- 4) 本田創造「アメリカ黒人の歴史」岩波新書 1991.3
- 5) 上杉忍「アメリカ黒人の歴史」中央新書 2013.3
- 6) 山田恵「アメリカ人とは誰かーJean Toomerのアメリカ人宣言を読むー」東北大学大学院 国際文化研究科論集 第9号 2001.12 pp15～25
- 7) 研 攻一「社会的差別概念に関する調査研究(2)ー黒人差別を理解させるための教示文の効果」羽陽学園短期大学紀要 第10巻4号 2018.2 pp115～132
- 8) 川北稔「砂糖の歴史」岩波ジュニア新書 岩波書店 1996.7 pp55～59
- 9) 大津尚志「教科書記述における差別問題ーその統制と実態・日米比較ー」東京大学教育行政学研究室紀要 第15号 1996 pp47～48
- 10) 小松田直「手にとるように世界史がわかる本」かんき出版 2008.3 pp322～325
- 11) 宮崎正勝「早わかり世界史」日本実業出版 2008.10 pp204～205
- 12) 我妻洋 米山俊直「偏見の構造 日本人の人種観」NHKブックス 1962.5 pp115～140
- 13) クロード・ブラウン「ハーレムに生まれて」小松達也訳 サイマル出版会 1971.3
- 14) 「米人種問題が再燃、警官5人死亡、黒人射殺の報復か」日本経済新聞 2016.7.8
- 15) 「警官撃たれ5人死亡、黒人射殺抗議のデモ中『白人警官殺したい』デラス」毎日新聞 2016.7.9
- 16) 「人種差別 全米で抗議(南部衝突から1週間)」中日新聞 2017.8.21



## SUMMARY

Kohichi TOGI:

The Investigation of the Concept of Social Discrimination (3)

– The Effect of Teaching Sentences to Understanding the Discrimination to the Black People –

The purpose of this study is to examine which of two teaching sentences is effective. Both groups were taught the common teaching contents, they were “the history until triangle trade” “American modern history concerned with black people”. In addition, A group is focused on “the process of dealing with sugar cane”, B group is focused on “the process of dealing with sugar cane and cotton to make the product, and appropriate temperature and precipitation to cultivate”.

Also, the problem was ascertained whether Japanese view of the discrimination to the black and other race people by two teaching sentence would be decreased.

The following results were acquired.

- (1) The B group is more effective compared with A group in all score. In the subordinated 3fields, B group is more effective to A group, and indicated more effective to the tasks of “the history”
- (2) In the case of dividing the three class of the post score in “the process of dealing with sugar cane and cotton to make the product, and appropriate temperature and precipitation to cultivate”, middle class of A group is more effective and upper class of B group is more effective to the tasks of “the history”
- (3) In the difference of response type of pre score of “the process of dealing with sugar cane”, “correct response” of A group is more effective than “wrong response” to the task of “the process of dealing with cotton to make the product, and appropriate temperature and precipitation to cultivate”
- (4) In the decrease of the discrimination sense of Japanese, A group is more effective of the task of “Do you think that the discrimination to black people disappear within ten years ? ” and in “the reason of thinking so” and transfer tasks, B group is a little more effective than A group.

(K.TOGI ; Emeritus Professor of Uyo Gakuen College)